

に、よくある飲酒三昧に耽つてゐるのであつた。けれども何でも、いゝから飲みさへすれば直ぐ酔つた氣になれるといふ方であつた。そして、飲まないでは生きて行けないといふ位に、酒類は彼に取つては必需品となつてゐた。たゞ朝だけは眞面目な男らしく、ネクリュウドフの訪問を受けた今は丁度その眞面目な時であつた。朝は、いつも彼は人の話など聞いてもよく聞き分けもし、自分の好きな「飲みて賢なれば二徳あり」といふ格言を多少實際に示し得る方であつた。彼の飲酒癖は上官の間にも知られてゐたが、それでも彼は他の多くの者より教育があつた、尤も其教育も彼が飲み出してからは夫れきりで停つた。彼は決斷に富み、事務に熟達し、聰明であり、酔つても分別を失はないといふ方なので、今の地位に置かれてゐるのであつた。

三三

ネクリュウドフは自分が力を盡してゐるのは罪がなくて不當な判決を受けた女であるといふ事、その爲めに皇帝に愁訴狀を出してゐるといふ事を將軍に話して聞かした。「なる程、なる程、それで？」と將軍は云つた。

「それで其女の運命に就いての報告が、遅くとも今月中には丁度此地に私宛てに來る事にな

つて居ります、彼得斯堡でさう約束をして置いたのです。」

將軍はネクリュウドフより目を離さず、手を差し伸べて卓上の呼鈴を短い指で押し、巻煙の煙を吹いたり時々ひどく咳をしたりしながら、黙つて耳を傾けた。

「で私は、その愁訴狀の返答が來るまで其女を此地に残して置くことをあなたに願ひしたいのです。」

給仕が入つて來た。

「奥さんはもう起きたか何うか訊いて來い。」と將軍は給仕に云つた。「それからもつと茶を持つて來い。——それだけですか、御用は？」とネクリュウドフに言葉を向けた。

「も一つのお願ひは、」とネクリュウドフは又云ひ續けた。「同じ今度の一行の中に居る或る國事犯に關する事です。」

「うむ、なる程。」と將軍は仰山に頷いた。

「その國事犯は重い病人でしてね、瀕死の境に居るんですよ、ですから多分此地の病院に止められる事と思ひます。それで同じ國事犯の一人の女が、その病人に附添つて残り度いと云ふのです。」

「それは其病人とは他人なんですか。」

『さうです、併し近親でなくてはいけないならば其病人と結婚してもいゝと覺悟をきめてゐるのです。』

七九四

將軍は目を輝かしてネクリュウドフを熱心に見つめ、何も云はないでたゞ其を吸つた。さう見つめる事によつてネクリュウドフをどぎまぎさせようといふ心が如何にもありありと分つた。

ネクリュウドフが云ひ終ると、將軍は卓の上の本を取り、急いで葉繰り乍ら婚姻に關する個所を開け、そこを讀んだ。

『罰は何と云ひ渡されてゐるのです？』と本より目を上げて尋ねた。

『懲役徒刑です。』

『さうですか、それでは婚姻によつて其囚徒に都合をつけてやるわけには行きませんか。』

『さうでせう。併し……。』

『まあお聞きなさい、斯うなんです、自由な普通人が其女と結婚するとしても、其女は矢張り自分の罰は受けなければなりません。で、こゝでは其二人のどちらが罰が大きいかといふ事が問題です、男の方ですか、それとも女の方ですか？』

『どちらでも懲役徒刑なのです。』

『ぢやあ逕庭なしですな。』と將軍は笑つた。『それでは男は病氣とあれば此地に留められるでせう、そして何とか樂にして貰へるでせう、併し女はよしんば其男と結婚したところで残るわけには行きませんか。』

『奥様は珈琲を召上つて居ます。』と給仕は知らせに來た。

將軍は頷いた、そして又云ひ繼いだ。

『しかし尙ほよく考へてはおきませう。で、その二人は何と云ふ名です。これに書いて置いて下さい。』

ネクリュウドフは書いた。

それから此地で其病人の囚徒に面會する事を許して貰ひ度いといふネクリュウドフの乞ひに對しても將軍は、『それも出来ませんな。』と云ふのは私が少しでもあなたを疑つてゐるわけではありません。だがあなたは囚徒の誰彼に同情がお有りなさる、そして又錢がお有りなさる。何でも買収といふ事が我々社會の通り相場ですよ。ね、さうぢやありませんか、私が五千エルストも隔てた處に居る一人の人間を何うして監督が出来ませうや。皇帝とは云ひ條、矢張り彼地だけでの小さい王様でさ、丁度私が此地の王であるやうにな。』と云つて將軍は笑つた。『多分あなたも國事犯を幾度もお訪ねなされたでせう、そして取締りの者に錢を

握らしたのでせう、それで面會が許されたのでせう。ね、さうぢやありませんか。」と將軍は又笑つた。

七九六

『お言葉の通りです。』

『さうでせうとも、それより外にあなたに仕方のなかつた事は私にも分つて居りますよ。あなたは犯人に面會しようとする、犯人を氣の毒に思つておいでになる、そして一方典獄なり護送士官なりはあなたから錢を握らして貰ふ、これは當り前の事なんです、何故と云つて、あなた、彼等は皆ちよつびり許りの給料を貰つて家族を養つて居りますもの、外に仕様はないぢやありませんか。私があなたなり彼等なりの立場に居るとしても、矢張り同様、買收したりされたりするより外はありませんよ。だが併し私の職分として法律の厳格な規定を曲げる事は出来ません、兎角同情に驅られ度がる男として尙ほ更出来ません。私は確りしたことをやる役人として許されて居りますし、一定の條件で信任を受けて居りますからには、その信任に背くわけには行きませんよ。で、この話はもうこれで片付いたわけですから、どうです、彼得斯堡では？ 何か面白い話でもありませんか？』

そして將軍は如何にも何か異つた事でも聞き度いらしく、又自分の仁義深いところなどを見せ度いらしく、何やかと尋ねたり話したりした。

二三

『それはさうと、お宿は何處です。デュウヨフ館ですか。あの宿屋はいけませんな。食事に何卒いらつしやい。』と云つて將軍はネクリウッドを送り出した。『五時にですよ、ね。あなたは英語が話せるでせうね。』

『ええ。』

『ぢやあ大變好都合だ。丁度今英國人が一人此地に来て居ましてね、西比利亞の監獄制度と追放の状況を視察してゐるんですよ。で、その人も今日私の所に食事に来る事になつて居ります、ですからあなたも来て下さい。五時ですよ。私の家内は時間を正確にする方ですから、どうぞそのお積りでね。その時その女囚の事も何とか御返答させよう、病人の國事犯の事もね。どうにかなるでせう、誰か残して附けて看病させる事も出来るでせう。』

ネクリウッドは其處を辭して、何となく非常に元氣づいて郵便局へと馬車を走らした。郵便局は天井の低い室で、壁には書類棚が幾らも設けてあつた。格子の向うには、數名の局員が腰かけて、犇々と押しかけて来てゐる人々に手紙を渡してゐた。局員の一人は、小首を傾けながら絶えず手紙に消印を押しては次へ押しやり押しやりしてゐた。

ネクリュウドフは長く待たされないので、名を云ふと間もなく可なり大きい一束の郵便物を渡された。その中には爲替もあり、二三通の手紙もあり、書籍や雑誌もあつた。

ネクリュウドフは夫れ等をすべて受取ると、一人の兵卒が一冊の帳簿を持つて何やら待つてゐる腰掛の方へ行き、其隣に腰かけて受取つたものを讀んだ。赤い封蠟をした立派な封筒の書留郵便もあつた。彼は封を切つて書いた物を出してみると、セリ・オニンからの手紙で、一葉の公文書が同封してあつた。

ネクリュウドフはさつと頭に血が上つた、心臓はひたと鼓動を止めた。カテウシヤ事件の最後の裁決が書いてあるわけであつた。「どちらに決したのでらう？ 峻拒かしら？」

ぎこちない書體で小さく讀み難く書いてある全文をネクリュウドフの目は貪るやうに速く讀み通した。さうしてほつと嬉しさの太息をついた。願はしい裁決であつたのである。

『我が友ネクリュウドフ、つい先月の我々の會談はおれに甚深な感激を遺した。マスロオフ事件に就いて君の云つたのが本當の事だつた。おれは、熱心に一件書類を残らず調べてみた、そして彼女に對する言語道斷の不當が敢て行はれてゐたのを發見したのだ。併し、夫れを取消させるには請願局に就て頼むより外方法がなかつたが、幸ひ君が既に愁訴狀を出してゐたので、おれも夫れが聞届けられるよう骨折つてゐたら、うまく行つた。だから

伯爵夫人に聞いた君の滞留所宛てに爰に指令の寫しを同封で送る。原指令書は彼女が裁判の期間拘留されてゐた所へ送られたから、恐らく同所より直ぐ西比利亞の政廳へ廻送される事と思ふ。急いで此の愉快な報知を君の許に送る。往時の友情を以て握手をしようではないか、我友。さよなら。君の親友 セリ・オニンより。』

指令書の本文は次の通りだつた。
『畏キ邊リニ宛テ捧呈スル愁訴狀受理ノ陛下直隸官房ヨリ通達ス、何部、何號、何年何月。

畏キ邊リニ宛テ捧呈スル愁訴狀受理ノ陛下直隸官房長官ハ爰ニ町人カタリイナ・マスロオワニ對シ、恐惶頓首シテ捧呈シタル書類ニヨリ、陛下ニ於テ特ニ軫念アラセラレマスロオワノ願ヲ御聽許アリ、懲役徒刑ヲ更メテ移住刑トシ、遠隔ナラザル西比利亞地方ニ送遣スベキ旨、畏レ多クモ御下命アリタル事ヲ通告スルモノナリ。』

嬉しい報知であり大切な報知であつた。ネクリュウドフが彼女の爲めに又自分の爲めに願へた丈けの事は聞届けられたのであつた。勿論彼女の境涯が斯うして變改されるとなれば、彼の彼女に對する關係に又新たな複雑と紛糾とが生じて來るのは當然であつた。即ち彼女が懲役徒刑に處せられてゐる間は彼が彼女に求めた結婚は表面だけのものであつて、たゞ出

来るだけ彼女の難儀を軽くしてやるといふ意義があつたのみであるが、今はもはや實際の同棲を妨げる何物もない事になつたのである。さうして斯うなつてみると、彼には其準備はまだ出来てゐなかつたのである。加之彼女とシモンソンとの事は何うなる可きものか？ 昨日の彼女の言葉はどう解釋したらいいものか？ 又彼女が實際シモンソンと結婚をする氣になれば、それは果して良い事か悪い事か？

彼は今夫等の考を纏めて極りをつける事は出来なかつた、そして深く考へ續ける事をやめた。「後で何とか極まるだらう、今はおれはただ一刻も早く彼女に會つて此の嬉しい報知を傳へねばならない、そして彼女を自由な身にしてやらねばならない。」

彼は今、手に入つた指令書の寫しがあるから面會するのも難作はない事と思つた。郵便局を出た彼は、直ぐ監獄に走らすべく馭者に命じた。

先き程將軍は監獄で囚徒に面會する事を許さなかつたけれども、今迄に上長官の許さなかつた事を下級の役人によつて幾度も容易に許された経験があるので、ネクリュウドフは今又監獄に行かう、そして彼女に此の悦び事を傳へよう、或は今日自由の身になしてやる事が出来るかも知れない、同時にクリルツァフの容態も聞いて來よう、クリルツァフとマリア・パウロフナの二人に今日將軍が云つた言葉も傳へてやらう、と心をきめて行つたのである。

典獄は脊の高い威風堂々たる肥つた男で、鼻下にも頬にも鬚を生やしてゐた。鼻下のは先きが曲つて垂れてゐた。彼は非常に嚴肅な態度でネクリュウドフに應對し、上長官よりの特別の許可がない限り、個人として囚徒に面會は相成らぬと斷然とはねつけた。モスカウなどいふ大都市の監獄でも併し既に幾度も面會を許されたとネクリュウドフが云ふと、典獄は、「そりやさうでもありません、併し私は許しません。」と答へた。その語調は「あなた方は都の紳士だなどいふ事を鼻にかけて、我々を威かす積りでせうがね、こんな偏鄙な東部西比利亞の役人たる我々とても、規則はちやんと心得てゐますよ、それがお分りにならなければ分るやうにしてあげませう。」と心で云つてゐるやうであつた。

皇帝直隸官房の指令書の寫しを見せても、典獄は頑として聞き入れなかつた。彼を監獄の内に入れるわけには行かないと云つた。指令書の寫しを見せたら、夫れだけでマスロオワは放免になりさうなものと同様に思つてゐた由をネクリュウドフが云ふと、典獄はたゞ憫むやうに微笑を見せて、誰の放免であらうと、凡て上級官衙よりの命令を待つて始めて行ふものである由を云ひ聞かした。たゞマスロオワに減刑の由を知らせる事と、上級官衙よりマスロオワ放免の命令が來たら一刻も躊躇なく放免するといふことと、それだけは典獄に於て承知した。

典獄は又クリルツォフの容態の如何を知らせる事をも拒んだ、のみならずさういふ名の囚徒が居るか居ないかをも告げ知らせる事は出来ないと言つた。

典獄がそんなに嚴酷であつたわけは主として、定員の二倍も囚徒を收容して獄内にうぢやうぢやと充満してゐる中に、鑿扶助が流行り出してゐるからであつた。馭者は歸りの途中にネクリュウドフに話して聞かした。「監獄の中では大勢が死によりまするだ、へい。病氣が流行り出しやしてな、毎日二十人許えも埋めとりまするで。」

二四

監獄では一切不首尾だつたが、それでも元氣よくネクリュウドフは馬車を知事官房に立寄りすべく走らした。カテウシヤ減刑の指令が來てゐるかを聞かうと思つたのである。

指令はまだ來てゐなかつた。で彼は置く旅館に歸り、セリ。オニンと辯護士フナアリン宛の手紙を書いた。書き終つて時計を見ると、はや將軍の馳走になりに行く可き時刻であつた。

ネクリュウドフは將軍の宅へ馬車を走らせながら、減刑の沙汰を聞いたらカテウシヤはどんな氣持をするであらうか、何處に行つて居を定めようと思ふだらうか、自分は彼女とどん

な具合に生活して行く可きであらうか、シモンソンは何うするといふのだらう、彼女は彼に對してどんな關係になるのであらう、……などと又もや考へた。そして彼女が別人になつた事をも思ひやつた、なほ又其過去をも追想した。

「いや、何も思ふまい、忘れてしまはなくてはいけない。」さう思つて彼は又彼女に關する考を避けることに努めた。「何とかなるだらう。」そして彼は將軍に何と云はうかと、それを考へた。

將軍の家での其食事は金持や高官等の生活には敢て珍らしくない相場通りな、あらゆる贅を盡したもので、ネクリュウドフの十分に慣れてゐる所であつた。長い間窮乏を忍んで來た後として、ネクリュウドフはそれを贅澤としてよりも寧ろ極く平凡な需要として悦んだ。

主婦たる將軍夫人は嘗て宮中に侍女をしてゐた事のある彼得斯堡女で、露西亞語が下手でも佛蘭西語が上手であつた。からだをいつも著しく眞直ぐにしてゐる習慣と見え、手を動かすにも臂は必ず脇腹に着けてゐた。良人に對しては平靜な、幾らか打沈んだやうな態度で萬事に氣を付けてやり、客には人によつて差等を附けはするが姑づ丁寧な方であつた。

ネクリュウドフを遇するには、彼女は彼をさも自分と同じ身分の者とときめてゐるかの様子で、それとは分らない位の上品に巧みに彼の歡心を買ふべく努めるのであつた。さう遇され

てみるとネクリュウドフも自分の卓越したあらゆる點を意識させられて、少からぬ満足を感じた。あなたが今度西比利亞くんだりまで來らしたのは、突飛と云へば突飛かも知れないけれど、併し立派な尊敬すべき行爲である事は、私はよく知つてゐます、私はあなたをお偉い非凡なお方だと思つてゐます、といふ心持を彼女は、彼に夫れとなく見せるのであつた。さういふ具合に機嫌を取られて、華麗な將軍の家の客間に贅を極めたもてなしを受けたネクリュウドフは、すつかり好い氣持になつて、善盡し美盡した一切の設備にも、上等な食物や葡萄酒にも、自分の屬してゐる社會の上品な教養ある人々との會話が輕快な自然な品位ある調子で運ばれて行くのにも、凡てに満足を感じるのであつた。最近二三ヶ月間に嘗めて來た一切の事はまるで一種の夢でもあつたかのやうに、今やつとそれが覺めて實際に復つたかのやうに感じられるのであつた。

將軍夫婦と將軍の娘夫婦と副官とが家の者で、客は英國人と、ある金鑛の所有者たる商人と、西比利亞の或る遠い縣の知事で旅行の途中此處に寄つてゐるといふ男と、それだけであつた。皆ネクリュウドフに取つて愉快な人々であつた。

英國人といふのは生き生きした丈夫さうな男で、佛蘭西語は拙かつたが、見聞が廣く趣味に富んで、亞米利加、印度、日本、それから西比利亞の事など何でもよく話した。

金鑛の所有者たる年若い商人は百姓の子であるが倫敦仕立のフロックを着、ダイヤモンドのカフス釦をつけてゐた。彼は或る大きい圖書館の持主でもあり、慈善事業にも少からぬ寄附をして居り、歐羅巴流の自由主義を奉じてゐた。ネクリュウドフは彼が健全な露西亞百姓の系統を土臺として夫れに歐洲文明の接木をした全く新たなタイプである事に、少からぬ贊同的興味を感じた。

西比利亞の或る遠い縣の知事といふのは、嘗て或る中央官衙の長官をしてゐた事のある肥満した紳士で、柔和さうな碧い目を持ち、縮れた薄い髪を貯へ、手は白く優しく、氣持のいい笑ひ方をする男であつた。彼は賄賂を決して受けないので、將軍に特に尊敬されてゐたが、音樂の熱愛者でもあり又自ら巧みなピアノニストでもある將軍夫人には、又彼が音樂家でもあり彼女とよく合奏もするので重んぜられてゐた。

顎の黒く青い快瀾な副官は人に對して何事にも親切で、如何にも善良な性質らしかつた。併しネクリュウドフが誰よりも氣に入つたのは將軍の娘の若夫婦であつた。娘の方は非常な美人で、又非常に好い妻君であり、はじめ持つた子供二人を又となく可愛がつてゐた。

許して呉れなかつたので長い間彼女が兩親と喧嘩をした後で、やつと願が叶つて結婚した良人は、モスカウ大學出身の自由主義の男で、物事に慎み深く氣が利いて居り、統計學を修

め、殊に他國より西比利亞に移住した諸民族に就て研究し、それに愛を寄せ其死亡を防ぐ事に心がけてゐた。

八〇六

一同もネクリュウドフに對して親切であり好意を持つた、のみならず興味ある新しい人物として彼と知り合つたのを悦んだ。制服を着て襟に白十字章をつけた將軍は、食卓の方にやつて來ると、ネクリュウドフに古くからの友人でもあるかのやうに挨拶をし、蝶鮫の卵の鹽漬や、其他冷い食物にブランデエを添へた露西亞の晚餐に付き物の前食イシヒスを、客一同に進めた。

將軍はネクリュウドフに、今朝自分を訪問した後でネクリュウドフはどうしたかを尋ねると、ネクリュウドフは郵便局に行つて、あの訪問の時話した女囚の減刑の報知に接した由を語つた、そして尙ほ一度監獄に面會に行く許可を與へて貰ひ度いと願つた。

將軍は晚餐の席で職務上の事などを話しかけられたのが如何にも不愉快らしく、顔を曇らして何とも云はなかつた。そして其時傍に寄つて來た英國人に、

「ブランデエを召上りますか。」と佛蘭西語で尋ねた。

英國人はブランデエを飲みながら、自分は今日は此地の中央教會と工場を視察した由を話し、なほ徒刑囚の監獄を見たいと云つた。

「うむ、それでは好都合だ。」と云つて將軍はネクリュウドフに向ひ、「ではあなたも一緒に رفتら好いでせう。」と云つてから、副官に、「このお二人に認可書を書いてやつて下さい。」と云ひつけた。

「するとあなたは何時行きますか？」とネクリュウドフは英國人に尋ねた。

「私は今夜行く事にしようと思ひます。」と英國人は答へた。「夜分だと皆監獄に居るでせうから。そして少しも準備などしないで居る所に出し抜けに行つて、有りの儘の實際を見たいと思ひます。」

「立派な所を見ようと云ふんですね。よからう、御覽になるがいゝ。私も監獄の事に就いては折々書きましたが、世間で氣を留めて呉れませんでな。だから外國の新聞に出た記事でも読んで反省するがいゝんです。」と云つて將軍は食卓の方へ行つた。其處に夫人は丁度客を一々席に請じてゐる所であつた。

ネクリュウドフは夫人と英國人との間の席に着き、向うには將軍の娘と以前の中央官衙の長官が腰かけた。

食事中は切れ切れに話が續けられた。英國人が居た事のある印度の話も出たり、トンキン旅行談となつたりした、將軍はトンキンは大嫌ひで甚く其攻撃オトをしたりした、それから話は

西比利亞一體の悪習、賄賂や其他が盛に行はれてゐる事に及んだ。ネクリュウドフはそんな話には少しも氣が乗らなかつた。

八〇八

併し食事が済んでから客間で夫人と英國人の間に、グラッドストーンに關して非常に有益な興味ある話が持上り、ネクリュウドフは夫れにちよ、い、ちよ、い、註や評を挿入れたりしたが、彼はそれを自分乍ら巧く行つたものだと思つた。のみならず夫人も、英國人もさう思つたらしかつた。

上等の食事を取り、葡萄酒を飲み、柔かな安樂椅子に腰かけて珈琲を吸つたり、教養ある親切な人々と打混つて話などしてゐると、ネクリュウドフはますます愉快な氣持を覺えた。尙ほ又英國人の所望で以前の中央官衛長官と將軍夫人がピアノに就き、かねてよりよく練習の積んだベエトオエンの第五シンフォニイを弾き始めると、ネクリュウドフは長い間飢ゑてゐた精神的の享樂に接する事を得て、自分だけの充足を覺えるのみならず、周圍一同に對しても十二分の満足を感じ、抑も何といふ善良な人々が居る事だらう、又自分の卓越性も何と大 きなものであるのだらう、と今始めて夫れを自認するかのやうな氣持になつた。

弾き方も巧く、口誦も勝れたものであつた。少くとも其のシンフォニイを熟知し愛好してゐるネクリュウドフにはさう思へた。美しい緩徐調に耳を傾けてゐる間に、彼は漫ろに自分

の一切の美點に自ら感激して涙ぐましい氣分になつた。

演奏が終るとネクリュウドフは夫人に、久しく飢ゑてゐた耳を娛ましめる事の出來た禮を云つて暇を告げて歸らうとした。すると將軍の娘は彼の前に來て顔を赧めながら、

『さつきあなたは私どもの子供の事をお尋ね下さいましたわね。如何？ 御覽になつて下さいませんか。』と云つた。

『この娘はねえ、誰にでも子供を娛しんで見て貰へるものと思つてますのよ。』と母親たる夫人は娘の罪の無い可愛い臆面無さを笑ひ乍ら、『公爵にそんな事が、お前、お氣に召しますものか。』

『いえ、そんな事ありません。私は子供は大好きです。』とネクリュウドフは、溢れる許りの慈母の愛に感激した。『どうぞ見せて貰ひませう、さ、どうぞ。』

『公爵を子供見せに引張つて行き居るわい。』と將軍はカルタ臺の方から笑つた。娘嬢と金鑛の所有主と副官とがカルタの相手に腰かけてゐた。『さあ、さあ、賦役をお出したさい。』

年若い妻君は自分の子供を見て貰ふといふ事と、どんな挨拶をされるだらうかといふ氣遣ひとで、氣をわくわくさせながら、ネクリュウドフの先きに立つて急ぎ足に奥へ行つた。白い壁紙を貼つて薄黒い笠をはめた小さいランプで微かに照らされてゐる三番目の室に、子供

の寢臺が二つ並んで、その間に頬骨の出た人物の好ささうな西比利亚式の顔だちの看護婦が一人白い肩衣を掛けて腰かけてゐた。看護婦は丁寧に禮をして挨拶した。年若い母親は始めの寢臺の上へ前屈みになつて、

「これがカティアと云ひますの。」と云ひ乍ら、刺繡をした掛け夜具を少し剝いで見せた。二歳になる髪の長い女の兒は小さな口を開いてすやすやと靜かに眠つてゐた。

「可愛いでせう？ 二歳になりますの。」

「可愛いものですな。」

「こちらはワッシュウクといふ名ですわ、お祖母様がつけましたの。丸つきり異つた型ですわね、西比利亚型なのね、ね、さうでせう？」

「さうですね、確りした立派な坊ちゃんですね。」と云つてネクリュウドフは眠つてゐる男の兒を眺めた。

若い母親は脇に立つてにこにこしてゐた。

急にネクリュウドフは鎖の音、半分剃られた頭、殴り合ひ、喚き叫び、瀕死のクリルツツの事、カテウシヤの事などを思ひ出した、そして嫉妬の思を覺えた。彼も今日の前に見てゐるやうな裕福な清い幸福が欲しくなつた。

尙ほ彼は再三子供を褒めそやして、母親を悦ばした上で、又母親と共に客間の方に引返して來た。そこに英國人は約束通り監獄へ一緒に行く可く待つてゐた。ネクリュウドフは暇を告げて、英國人と共に外に出た。空模様は變つて、大粒な雪は道にも屋根にも、庭の木々にも、馬車の屋根にも、馬の背にもひらひらと降つた。英國人は別に自分の立派な馬車で來てゐたので、ネクリュウドフは其の馭者に監獄へ走らせるやうに云ひつけ、自分は自分の馬車に乗つて後より續いた。

二五

陰氣な監獄の建物は、門の際に番兵が立ち、球燈がついて、降る雪に今は眞白になつてゐたが、それでも矢張り慘とした光景であつた。

恰幅のいゝ典獄は外に出て來て、二人に與へられた認可書を球燈の光で讀んでから、二人を内へ案内して行つた。門を入つて右手の扉の内を横ぎり、階段を上つて事務室に入り、席をすゝめて、そして二人の來意を伺つた。ネクリュウドフがカテウシヤに會ひたいと云つたので、典獄は直ぐ彼女を呼びに看守をやり、それから二人が親しく檻房を見に行く前に英國人が質問する個條に一々答へた。

「此の監獄に收容すべき定員は幾人です？ 今現に幾人居ります？ 男囚が幾人で、女囚が幾人です？ 子供は何人あります。懲役徒刑と移住刑と、自分の意志で囚人に従って行くのと、それが各幾人です？ 病人は幾人です？」

さういふ英國人の言葉と典獄の返答をネクリュウドフは通譯して聞かせるのであるが、ただ全く機械的にそれをするだけで、少しも氣は入らなかつた。といふのは又今に直ぐカチュウシヤに會ふといふ事が、何故ともなく又妙にネクリュウドフを昂奮させてゐるのであつた。で通譯をしてやりながらも、足音の近くなつて来るのに耳を欬て、戸の開くのに氣を配つて、今迄に斯うして幾度も會つたのではあるが、もう今度で最後だらうなどと思つてゐると、はやカチュウシヤは看守に連れられて入つて來た。頭には布を巻きつけて獄衣をまとうてゐた。ネクリュウドフはちらと彼女を見た其刹那、何となく壓迫して來るやうな一種の敵對感を受取つた。

「おれは生きて行く、家庭を持ち子供を持つて、人間らしい生き方をして行くのだ。」と彼は、彼女が急ぎ足で入つて來る時さう思つた。

彼は立ち上り、二三歩行つて彼女を迎へた。彼女がまだ何も云はない中に、彼女の昂奮した顔色は直ぐネクリュウドフの目に止つた。勝誇つたやうに屹としてゐる其顔は、彼が彼女

に今までまだ見た事のないものであつた。彼女は顔色を赤くしたり青くしたりしながら、上衣の端を苛々しげに弄り、彼を見るかと思ふと直ぐ又目を伏せたりした。

「知つてゐますか。」とネクリュウドフは彼女に尋ねた。

「え、聞きましたわ。それで私ウラディミール・イワノオキッチさんと結婚する決心をしてゐますの。」口早にさういつた彼女の調子は、さう聞かれたらさう答へようと豫め考へて置いたかのやうにはきはきしてゐた。

「何ですつて？ ウラディミール・イワノオキッチ君と？」とネクリュウドフは問ひ返したが、彼女は彼の云ひ終るを俟たず、

「え、さうなの。あの人が私と一緒に暮し度がつて居りますから……。』と彼女は云つた。が、自分ながらはつとして又云ひ直した、『私が傍に居るのを望んで居りますから。だつて私、それより好い事が何うして望ませう。さうなればあの人の役にも立ちませうし、又他の人達の爲めにもなりませう。私の身はどうだつて宜しいのですもの。』

二つに一つの彼女の心に相違なかつた。シモンソンに戀してゐる、それでネクリュウドフの捧げようといふ犠牲はネクリュウドフ自身にも辛さうではあるし受け入れない、といふ心か、又は今もやはりネクリュウドフを愛してはゐるのだが、愛してゐるからネクリュウドフの

爲めを思つて自分と彼との結婚は断念して、シモンソンと運命を共にする、といふ心か、その何れかであらねばならなかつた。ネクリュウドフはさう思つて羞しさに顔を赧くした。

「あなたがあの人を愛してゐるのなら、そりや……。」

「私あんな人達を初めて知りましたの、どうして愛しないで居られませう、そしてウラディミル・イワノオキツチュさんは全く偉い人ですもの。」

「そりやさうです。」とネクリュウドフは云つた。「あの人は全く立派な人です、だから私も……。」

彼女は又云ひ遮つた、彼に餘計な事を云はれはしないかと恐れるかのやうに、又自分が云はうと思つてゐる事を云へなくなりはしないかと危むかのやうに、

「いゝえ、私が思召通りにしませんのを、何卒悪く思はないで下さいまし。」と云つた。「あなたも又どうぞお達者でお暮らし下さいまし。」

彼女は彼がつい今先き考へてゐた事を云つたのである。併し今は、彼はその事を考へてはゐない積りであつた、寧ろ全く別な事を思つてゐる積りであつた。彼は氣恥しくもなり悲しい氣持にもなつた。

「それでは我々二人の間の事はこれで終りとなるのですか。」

「さうでせうと思ひますわ。」と彼女は一種異様な微笑を湛へて云つた。

「でも私はあなたの力になりたいと思ふ。」

「私どもには、」と彼女は特に複數にして云ひ、そしてネクリュウドフの顔を見た。「私どもには何も不足な事はありませんわ。あなたにこそ私は今迄いろいろと本當に濟みませんでしたの、お蔭様で助かりましたわ。あなたが居て下さらなかつたら……。」そして尙ほ何とか云はうとしたが、聲が急に出なくなつた。

「どちらが濟まないんだか、私には分らない。神が總勘定をして呉れるでせう。」

「えゝ、さうよ。神様がして下さいますわ。」と彼女も低い聲で云つた。

「Are you ready? (もういゝんですか。)」と英國人は尋ねた。

「Directly (直ぐです。)」と、ネクリュウドフは答へて、なほクリルツァフの容態を彼女に尋ねた。

彼女は氣を鎮めて、知つてゐるだけの事を話した。クリルツァフは道中で弱つて、直ぐ病院に入れられたのである。マリヤ・パウロフナは看病をしたいと願ひ出たが、まだ許すとも何とも沙汰がないとの事であつた。

「では私もう行つていいこと？」と彼女は、英國人が待つてゐるのを見て云つた。

「私はまだ歸りはしません。又お目にかゝりますよ。」さう云つて、ネクリュウドフは握手を求めた。

八二六

「では、どうぞ御機嫌よう。」と彼女はやつと聞き取れる位に云つた。そして二人の目と目と行き會つた。彼は彼女の斜^{ヒナ}に見る其目に御機嫌よう云つた悲しげな微笑に、彼女がシモンソンと結婚する事にきめた理由の二つの推測の中で後のが本當であつた事を見た。彼女は彼を愛してゐるのであつた、愛してゐるから彼と結婚して彼の生涯を壊してしまひ度くなさにシモンソンと結婚して、彼には自由を與へるのであつた。

彼の手を握つてから、直ぐ彼女はさつさと出て行つた。

英國人はネクリュウドフの妨げにならないやうに、手帳に何やら書きつけてゐた。ネクリュウドフは壁に沿うた木の長椅子に腰かけて、氣恥しくもあれば落膽もした。長い間の努力の當てが向うから外れたやうなが、つかりした氣持を覺えて、椅子の後ろに凭れかゝつて目を瞑つた。

「で、如何です、檻房を御覧になりますか。」と典獄は尋ねた。

ネクリュウドフははつとして起き上り、英國人は記帳を終つた、そして檻房を見に行く事にした。

二六

典獄と英國人とネクリュウドフの三人は玄關口の間をよぎり惡臭の高い廊下を傳つて、懲役徒刑囚の入れられてゐる第一檻房に入つた。そこは七十人許りの囚徒で、中央に並んでゐる寢床の上にはや皆枕を列べて寝てゐた。

三人が入つて來ると囚徒等は鎖をぢやらぢやら鳴らして起き上り、半分刺つた許りの頭を見せながら寢床の前に並んだ。二人だけは起きなかつた。その一人は熱のありさうな赤い顔をした年若い男で、一人は絶えず呻^{うな}つてゐる老人であつた。

英國人は其若い男はもう長いこと病氣をしてゐるのかと尋ねた。「今朝からです。」と典獄は答へた。老人は大分以前から胃を悪くしてゐるのであつたが、病院が満員なので其處に入るわけに行かないとの事であつた。

英國人は氣に入らないらしく頭を打振り、囚人等と少し言葉を交へたいと典獄に請うて、ネクリュウドフに通譯を頼んだ。英國人の旅行の目的はたゞ西比利亞に於ける監獄制度を視察し記述するばかりでなく、信仰と贖罪による濟度を施し度いとも思つてゐたのである。

「囚徒達に云つて下さい、基督は皆さんを憐み愛してゐられます、皆さん達の代りになつて

死なれました。だから皆さんが基督を信仰なさるならば、それで皆さんは幸福になれますと、さう云つて聞かして下さい。」と英國人はネクリウッドに頼んだ。

云つて聞かせられる間、囚徒等は黙つて寢床の前に軍隊式の氣を附けの姿勢を取つた。

「この本の中に何事も一切書いてあります。本の讀める人がありますか、とさう通譯して下さい。」

二十人以上讀める者があつた。英國人が手提げの中から新約全書を二三冊取り出すと、頑丈な黒い爪を生やした筋張つた手を、荒い布の袖口から我も我もと差出した。英國人は福音書を二冊その室に置いて次に行つた。

次の檻房でも又同じ事が繰返された。同様に惡臭が充満してゐた、そして窓と窓との間には聖像が掛けてあり、入口の左には惡臭の桶を置いてあつた。枕を並べて寢てゐた事も同じで、三人が入つて來たので起き上つたのも同じであつた、又三人の囚徒は起きなかつた。その中二人は身を起しはしたが寢床に腰かけ、一人は寢たまゝで、巡視の彼等を見返りもしなかつた。英國人は前と同じ言葉をかけ、又二冊の福音書を置いて行つた。

第三の檻房には叫び聲が聞え、どたばたいふ音も響いた。典獄は扉をこつこつ叩いて、「靜かにせい。」と怒鳴りつけた。扉があくと一同は又同様に寢床の前に列んだが、二人の病囚は

起き上らず、喧嘩し合つてゐた他の二人は矢張り掴み合つたまゝでゐた。一人は相手の髪を掴み、一人は向うの鬚を掴んで、双方ともに火のやうになつて怒つてゐた。典獄が飛んで行つたのでやつと互ひに離れた。一方は鼻を撲られて血を出し、獄衣の袖で拭き拭きし、今一方は引抜かれた鬚の痕を切りに撫でた。

「看守長」と典獄は厳しく呼んだ。

風采の好い丈夫さうな男が入つて來た。

「どうも此奴等は聞き分けがないので始末に了へません。」と看守長は面白さうに目で笑つて典獄に云つた。

「よろしい、今におれが此奴等に覺えつかしてやる。」と典獄は額に皺を寄せて云つた。

「What did they fight for? (どうして殴り合つたのです。)」と英國人は尋ねた。

ネクリウッドは喧嘩の起りを看守長に問ねた。

「なあに、此奴が間違つて自分の足に巻く布と思つて此奴のを使はうとしたのです。すると間違はれた此奴が突きを一つ食はしたのです、すると此奴も負けてはゐないで掴み出したのですよ。」と看守長は相變らず笑ひながら云つた。ネクリウッドは英國人に其旨通譯して聞かした。

「この囚徒達に私少し話をしたいと思ひます。」と英國人は云ひ、それをネクリュウドフは又典獄に通譯した。

「差支へありません。」と典獄は答へた。

英國人は革表紙の福音書を取り出し、囚徒等に對する自分の言葉の通譯を頼んだ。

「あなた方は喧嘩をして打ち合ひをなさつた、けれども我々の爲めに死に給うた基督は争ひを審くに別な方法をお示しになつてゐます。と斯う云つて下さい。それから、我々が害を加へられた時は加へた人に對して何うするのが基督の教へに適うてゐるか、それを此の囚徒達が知つてゐますか何うか、それを尋ねて下さい。」

ネクリュウドフは又通譯して聞かした。

「役人様に告げやすだあ、さうして取裁えて貰えやすだあ。」と一人はちらと横向いて典獄を見て云つた。

「撲り飛ばしてしめえまさ、さうしるともうぐうの音も出しやしましねえや。」と他の一人は云つた。

さうださうだと賛成するらしい笑ひ聲が其處からも此處からも聞えた。ネクリュウドフはさういふ囚徒等の言葉を英國人に通譯した。

「基督の教へでは其正反對であると云つて下さい。人若し汝の右の頬を打たば、更に左の頬をも差出すべしといふのが、これが尊い其教へである由を云つて下さい。」と英國人は分り易いやうに自分が頬を差出したりして身振を見せて通譯を頼んだ。

ネクリュウドフがそれを傳へると、

「さう云はしやる其紳士様がやつて見なさるがえゝだ。」と云ふ者もあつた。

「右の頬片ひつ打かれて、そんで又左の頬片を差出すのけえ。」と寝てゐた病囚の一人は喚いた。

「そんだから散々にひつ打かれてしまふぢやねえかな。」

「そんだからよ、さう云はしやる人がやつて見なさるがえゝだあよ。」と後ろの方から云つて、面白さうに笑ふのもあつた。

堤の切れたやうに檻房一ぱいどつと笑つた。毆られて鼻血を出してる男も笑つた、病囚連も笑つた。

英國人は少しもどぎまぎせず、不可能のやうに見える事も信仰ある者には可能であり加之容易に可能である由を云つて呉れるやうネクリュウドフに頼んだ。

「それから囚徒達は酒を飲むか何うか、それを尋ねて下さい。」

「分つてらあ。」と云ふ者もあつた。そして一同又どつと笑つた。

その檻房には病囚は四人あつた。何故病囚は病囚だけ別にしないかと英國人が尋ねると、典獄は、それは病囚連自身が厭がるといふ事、又傳染性の病氣でないといふ事、看護長が見廻はつて診察してやつてゐるといふ事を答へた。

「もう二週間になるだけんど、見に来やしねえやなあ。」と云つた聲もあつた。

典獄はそれには何も云はずに、二人を次の檻房に案内した。

其處でも扉があいて三人が入ると、囚徒一同黙つて起立した、英國人は福音書を置いた。次の檻房でも又其次でも、順々に同じ事が繰返された。

ネクリウッドは夢のやうな氣持で従いて行つた。彼はもう御免を蒙るとも歸るとも云ひ出せる根氣がなかつた。が、つかりして氣も力も抜けてゐた。

二七

三人は懲役徒刑囚の檻房から移住刑の檻房へ、それから二人づゝ一緒に手錠と手錠をつながれてゐる囚徒等の室へ、それから自由の意志より囚徒等に従いて行く人々の室へと行つた。何處でも同じ事が繰返された。飢ゑ凍えてゐる者、病氣に罹つても碌に看病もされない

でゐる者罵り騒いでゐる者等、皆自由を奪はれた人間が野獸のやうになつてゐた。

英國人は聖書を一定の數だけ配ると、それをやめ、話をする事もよしにした。淺間しい光景と特に惡臭の漲つてゐる空氣とは、流石の英國人にも堪らなくなつたと見えて、典獄が何の室には何ういふ囚徒が入れられてゐるなどと云ふのに、分りました分りましたと手短かに答へてずんずん足を早めた。

たゞ移住刑の囚徒の室で三人は又稍長く足を停めた。其處では皆の注意を惹いた囚人が一人あつた、と云ふのは何の室でも典獄が入つて來れば病人でない囚徒は皆起立するのが禮であるのに、その一人の囚徒は立たなかつたのである。それは朝ネクリウッドが船の中で見た檻襖を纏つた皺だらけの瘦せた老人なのであつた。磨りきれて肩の邊りには大きな穴の出來てゐる汚い肌着をつけ同じやうなズボンを穿いてゐる其老人は、寢床の横に素足で胡坐をかきながら、入つて來た三人を咎めるやうな怪しむやうな目つきで見た。肌着の穴からも見える通り老人のからだは瘦せさらばうてゐるのであるが、その顔には凍とした色が出てゐた。老人は今まで他の囚徒等と何か話してゐた所らしかつたが、今その邪魔をされたので癢に觸つた恰好であつた。目を輝かし眉を寄せて憤つてゐた。

「起立せい。」と典獄は怒鳴りつけた。

老人は身動きもしなかつた。

『何しに起立するだあ。お前こそ此處に腰かけさつし、云うて聞かせる事があるだ。』と老人は云つて、傍の寢床を指した。

『何だと?』と典獄は音を引延べて脅かすやうに云つて、つかつかと老人の前に進んで行つた。

『私は此の爺さんを前に見た事があります。』とネクリュウドフは取急いで典獄に云つた。『どういふわけで此爺さんは牢に入れられてゐるんです?』

『パスを持たないので警察から送つて來たのです。私どもでは迷惑至極ですが、そんな事はちつとも思つて呉れないのです、どしどし寄越しますので全く閉口なのです。』さう云つて典獄は猶ほ怒を含んだ目で老人をちらと見た。

『行つたり行つたり。』と老人は猶ほ室に残つてゐたネクリュウドフを睨むやうに見ながら云つた。『人間に蟲を湧かさしといつて、それを見て悦ぶちふのかい。へん、行つたり行つたり。』

ネクリュウドフは廊下に出て、英國人と典獄とが或る開いてゐる戸口の前に立つてゐる方へ寄つて行つた。英國人は其室が何の爲めのものであるかを尋ねた。其處は死體室であつ

た。

『おやおや。』と英國人は云つて内へ入らうと云つた。

そこは普通の狭い室で、壁に吊してあるランプの弱い光に照らされて、寢床の上に横へてある四つの死體は、皆頭を壁の方に足を戸の方にやつて並んでゐた。

粗い布の肌衣とズボン下をしてゐるのは、頭を半分だけ剃られて薄い短い鬚を生やしてゐる大柄な男の死體で、はや全身硬くなつてゐた。青く黒い兩手は胸の上に組み合はして居り、足は何も掛けないで擴げて投げ出してゐた。その次には白い胴着と上衣をつけた老婆が頭にも足にも布も巻かずに横はり、薄い髪を小さく巻いてゐた。サフランの色した顔は皺だらけであつた。

老婆の隣に横はつてゐるのは又男の死體で、薄紫色の布を着てゐた。その色はネクリュウドフに覚えがあつた。

『この三番目の死體は誰です?』とネクリュウドフは自分の目を信じかねて尋ねた。

『これは身分ある人の死體です。正午頃病院から擔ぎ込んで來たのです。』

足には何も着けず、ばさばさになつた兩手は股の方につけて延ばし、薄紫色の木綿の肌着を着て、寢床の板の上に二つの死體の間に、クリルツォフは横はつてゐたのである。昨日ま

では慷慨悲憤したりして赤みを帯びてゐた不仕合せなクリルツォフの顔は、今は蠟のやうに青白くなつて、ちつとして動かさず、一種不思議な美を見せてゐた。ネクリュウドフは傍に進み寄り、自分の暖い手で死者の凍つたやうに冷たい露はな足を撫でてやつた。

否、決して決して夢ではなかつた。將軍の家で見た所のもの、あれこそ夢であつたのである。今爰に見る所のもの、及び斯ういふ光景によつて切に要望されてゐる所の一切の仕事、これこそ本當の生なのである、欺く事の出来ない現實の仕事なのである。

彼は英國人と典獄に暇を告げ、看守に玄關まで案内して貰つて、直ぐ自分の宿屋へ馬車を走らした。

二八

ネクリュウドフは長いこと旅館の自分の室内を往つたり來たりした。カテウシヤとの彼の關係は終つた、さうしてそれは良い終りではなかつた。思へば恥しくもない事はなかつた。けれども彼は今それのみに苦しめられてゐるのではなかつた、彼にはまだまだ別な仕事があるのであつた、それは管にまだ終つてゐない許りでなく、今迄よりも尙一倍の強さを以て彼を苦しめ彼に發奮を促し迫つてゐるのであつた。

彼は地獄に投げ込まれて毒の空氣を吸はせられてゐる數千の憐む可き人々の事を思つた。福音書の言葉に就いて檻房中が大笑ひした事を思つた、狂人と思はれてゐる檻樓の老人の事を思つた、憤死したクリルツォフの蠟のやうな美しい死顔をあの死體室に見た事を思つた。

そして以前の疑問が又新たな力を以て彼の目前に頭を擡げた、自分が氣が狂つてゐるのか、若しくは自ら聰明を以て許しあらゆる惨虐を生みつゝある彼等が誤つてゐるのか、どちらが是であるかと新たに問うた、けれども其の答は得られなかつた。

困難な事の中で一等主要なのは、あんな野獸のやうになつた人間を抑も何う扱へば可いのだ、彼等を解放しろと云ふのか、さうして社會全體を危険に陥れると云ふのか、といふ極めて平凡な反問に對して何等かの解答を見出す事であつた。

往つたり來たりするのに疲れて、彼はランプの傍の長椅子に腰かけ、先き程英國人に貰つた新約全書を機械的に手に取つた。それを彼は其處の卓の上に載せて置いたのであつた。

「さうだ、この本の中に一切の問題は解決されてゐるといふ。」さう思つて彼は聖書を開け、偶然出た馬太傳第二十章を讀んだ。

それから彼はランプの火をちつと見つめながら、一種恍惚たる心持を覺えた。彼の魂は久しい間忘れてゐた或る感激に襲はれたのである。それは長い困憊と苦惱の後に、急に安息と

自由を見出したかのやうな心持であつた。

八二八

彼は終夜睡らなかつた、そして今迄に幾度も読みはしたが深く氣にも留めずに過ぎてゐた其章の言葉を始めて理解した。書かれてある緊要な重大な悦ばしい事の限りを、彼は海綿の水を吸ふやうに吸ひ取つた。さうして今讀んだ一切の事は皆既に自分には體驗のある事のやうに思はれた、又既に知つてはゐたが十分に認めてゐたでもなく随つて信じたでもない事が今始めて確認され意識されるのであつた。今にして始めて彼は其處に書かれてある意味を完全に信ずる事が出来たのである。

何よりも彼は全體の教への齋してゐる意味を信じた、葡萄山の労働者の譬喩に於て示されてゐる意味を、特別に強く明瞭に信じた。彼等労働者は葡萄園の持主たる人に雇はれ、園主より其園内に仕事にやられながら、その園を自分達のものと思ひ、園内にあるものを自分達の爲めにあるものと思ひ、自分達は其園内でたゞ自分達の生を樂む外には何事も爲さないでよいと思ひ、はては園主を忘れてしまひ若し園主の爲めを思はせ又は園主に對する自分等の義務を思はせるやうな者があれば夫れを殺す程になつたのである。

「爰に一切の事が説明されてゐるのだ。」とネクリュウドフは思つた。「わが自も他も無茶苦茶な妄信を敢てし、我々自身が我々の生活の主人であるかのやうに思ひ、我々の生活は我々の享樂

の爲めに我々に與へられてゐるかのやうに思つて暮してゐるではないか。これは實に分りきつた無茶苦茶な妄信だ。我々が此世に生を受けてゐるといふものは、それは誰かの意志である、誰かの爲めである、然るに我々はただ我々の快樂の爲めに其のやうに生れたものだと思つてゐる。それではあの園主の意を奉じなかつた労働者のやうに、我々も不幸な目に逢ふのは分り切つてゐるのだ。

我々の主たる神の意志は基督の教へによつて語られてゐる。我々人類がその教へを奉ずる時、その時はじめて地上に神の國が建設されるのだ、さうして我々人類に最高の幸福が齎らされるのだ、それは我々には可能の事なのだ。

先づ神の國を建設する事を努めよ、その信仰に到達する事を努めよ、爾餘の一切は自ら臻るであらう。

だのに我々は餘事を先きにして焦り求めてゐるではないか、さうして見出す事出来ないでゐるではないか、さうして神の國を建設すべく努めないのみか、却つてそれを破壊しつゝあるではないか。

これがおれの實際生活によつて解決せねばならない問題なのだ。一つの生活が終つて、爰に他の生活が始まるのだ。だにおれはただ獨り身であるから、何も爲る事はないなどと思

つてゐたのか！

その夜、ネクリュウドフには全く新たな或る生涯が始まつたのである、それは彼の生活状態が一新される事になつたからと云ふよりも、むしろ其時以來彼の心に生起する事一切が以前には嘗て知られなかつた全く新たな他の意義を帯びるやうになつたからであつた。

—「復活」了—

大正十年四月廿五日印刷
大正十年五月五日發行

(定價金參圓)

◀活 復▶

編譯者

中島

清

發行者

佐藤義亮

亮

發行所

新潮社

社

東京市牛込區矢來町三番地

電話番町
八八〇
九三九
六九九
番番番

番二四七一(東京)替換

印刷所

東京市小石川區西江戸川町
電話小石川五九二番

富士印刷株式會社

印刷者 佐々木俊一

・作著イトスルト・

■ 戦争と平和	米昇 曙 夢氏譯	▼ 一冊貳圓五拾錢 送料一冊拾貳錢 冊三全
■ アンナカレニナ	原 白光氏譯	▼ 一冊貳圓參拾錢 送料一冊拾貳錢 冊三全
■ 復	活 中島 清氏譯	▼ 定價參 郵送料拾貳圓
■ 我が懺悔	相馬 御風氏譯	▼ 定價九拾錢 郵送料六錢
■ 人生論	相馬 御風氏譯	▼ 定價五拾五錢 郵送料四錢
■ 性慾論	相馬 御風氏譯	▼ 定價五拾五錢 郵送料四錢
■ 光ある ち光の中を歩め	阿部 次郎氏譯	▼ 定價五拾五錢 郵送料四錢
■ トルスツイ日記	昇 曙 夢氏譯	▼ 定價六拾五錢 郵送料六錢
■ トルスツイ書簡集	石田 三治氏譯	▼ 定價六拾五錢 郵送料六錢

書叢イトスルト

第一編 我が宗 教	生田 長江氏譯
第二編 イワン・イリイチの死	福士 幸二郎氏譯
第三編 幼年少年	江馬 修氏譯
第四編 ハチムラー ト	相馬 御風氏譯
第五編 闇のカ(附)生ける屍	中村 吉藏氏譯
第六編 コサツク	廣津 和郎氏譯
第七編 青	年 江馬 修氏譯
第八編 クロイツエル・リナタ	廣津 和郎氏譯
第九編 結婚の幸福	谷崎 精二氏譯
第十編 地主の朝	田中 純氏譯
第十一編 贖造手形	山内 封介氏譯
第十二編 セバストオポリ	島田 青峰氏譯

頁十二百三版中製布洋總

錢八各料送 ◆ 圓壹各冊一價定

■チリコフ選集

關口彌作氏譯

總洋布中版▼壹圓八拾錢
五百八十頁▼郵送料拾錢

露西亞現代新作家の傑作集也。その精妙なる心理描寫と機智に富める觀察とにチエホフの偉あり。その哀愁に満てる感想の脈々として人に迫るところツルゲネーフを想はしむるものあり。現下露西亞文壇唯一の花形、世界を通じて最も新らしい文豪の作品を知らんとする人は此の書に就かざる可からず。少壯露文學者關口氏の原文譯也。

■モオ・パツサン選集

平野威馬雄氏譯

總洋布中版▼壹圓六拾錢
四百六十頁▼送料拾錢

此の文豪の代表的傑作を選びたるものにして、收むるところ「警微」、「浮浪者」、「利那」等二十篇。多くは大膽の態度を以て、男女愛戀の世界を憚りもなく描き來つて其の一斑をだも掩はしめず。往々正視するに堪へざらしむるものもあるも、是れ此の文豪の觸感直ちに觸れ得たる人生赤裸の姿を描けるに外ならざる也。

ルツソオ著 新城和一氏譯

■孤獨な散步者の夢想

定價九拾五錢
郵送料八錢

これ實に「鐵梅錄」の續巻にして、ルツソオの絶筆也。痛ましき迄に神經過敏なる、体いなる魂を持てる不幸なる人の辛辣の苦悶と、孤獨の淋しさを看る可き也。

■世界文藝全集

泰西の代表的名篇傑作を集成し、其信用す可き譯本を刊行する叢書にして約百卷の豫定、稀有の大出版也。

第一編 フロオベル作 中村星湖氏譯

ポヴリイ夫人

總洋布▼四六版六百頁
天金▼價貳圓五拾錢
最上製▼郵送料拾貳錢

是れ實に近代小説の經典。これを讀まずして藝術を談すべからずと稱せらる。ポヴリイ夫人が、やる方なき愛戀の惱みより遂に墮落の深淵に陥るの徑路は、冷靜嚴肅なる親照と、細緻靈妙なる描寫とによりて活現せらる。まことに世界文藝の一大至寶たり。譯者中村氏また十年の努力を捧げ、佛の原文より直ちに移せる泣血の大翻譯也。

第二編 ゲエテ作 中島清氏譯

ギルヘルム・マイステル

總洋布▼四六版六百頁
天金▼價貳圓五拾錢
最上製▼郵送料拾貳錢

美貌世に稀なるマイステルが、幾多の女性に慕はれて、多情多恨の戀に身をつくすの情景を描き、紅紫綠亂、眼もあやなる濃艶の情史をなせる稀有の大戀愛小説也。これをゲエテの自傳と見て興味ある可く、又この絶大の文豪が女性觀戀愛觀を披瀝せるものとして、頗る深長の意義を藏す。譯は原文より直接移せるものにかゝる。

ダンマツツイオ作
生田長江氏譯
死の勝利

價壹圓五拾錢、送料拾錢

此書の題材にとれるは、近代人の近代的特色を發揮したる戀愛也。接吻せられたる額の背にも自我の冷笑するを禁じ難き戀愛也。渴望と、唾棄と、同情と、敵意と、靈感と、淫褻とを一にしたる病的戀愛の一切也。近代の藝術界に於て最も權威ある傑作の一。

ダンマツツイオ作
宮島新三郎氏譯
犠牲

價壹圓四拾錢、送料拾錢

結婚生活に入れる男子が其快樂を擅にせる後、遊蕩に耽り、妻も亦他の男の誘惑に會うて不義の子を産む。後、夫は放蕩に飽きて元の樂しき家庭に戻らんとして、其闖入者たる不義の子を犠牲にすると云ふ。深刻の心理を描寫せるもの。稀有の傑作と稱せらる。

モオバスサン作
廣津和郎氏譯
女の一生

價壹圓參拾錢、送料八錢

清純の處女が、獸的なる男子に蹂躪せられ、其夢を破り、其一生の幸福を破るの徑路を描いて飽くまで追實、飽くまで情到。冷靜なる觀察の裏に自ら作者が痛烈なる皮肉を認め、荒涼たる人生の見るに堪へざる姿を示す。佛國自然派の典型的代表作也。

ドオデエ作
武林無想庵氏譯
サフオ

價壹圓貳拾錢、送料八錢

若き詩人と美しくしき女優との戀物語也。流麗を極め豊麗を極め哀婉を極めたるに於て、爾餘の戀物語中此篇に及ぶもの無し。而も其遊るゝ迄にローマンスの甘美を漲らせたと共に深刻なる描寫を以て自然派の嚴肅な。本篇の特色は存す。

501
133

終